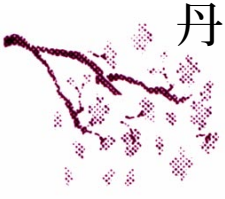
六花

2009

平成２１年

俳句雑誌 りつか
chairman Yamada Rokko
secondary c. and the
editor in chief Kotori
cover designed by little bird

4月号



丹（たん）

山田六甲

落　椿

あ　四阿（あずまや）に桜湯を吹き冷ましをり

た　箍（たが）締（し）める槌（つち）の音かな日脚（ひあし）伸（の）ぶ

ら　ランドセル蒲公英（たんぽぽ）に浮きをりゐたる

し　春水（しゅんすい）の響きの中に草暮るる

い　無花果（いちじく）の真白の枝に芽吹きをり

し　疾風（しっぷう）に流されずをり春の鳶（とび）

よ　横風の中を羽ばたく春の鴨（かも）

く　靴下に土筆（つくし）を詰めて戻りけり

ぶ　ぶらんこを飛び出したがる膝小僧（ひざこぞう）

つ　爪先の眠くなりけり青（あお）き踏（ふ）む

が　瓦斯（がす）燈（とう）の火屋（ほや）の朧（おぼろ）となりにけり

PDF= 俳誌の salon

め　目の前の湖(うみ)かき乱し春疾風(はるはやて)

ば　場当たりの旅にて拾ふ桜貝

え　鮴(えり)挿(さ)すや伊吹(いぶき)の風を追風に

る　瑠璃色に鳩(はと)睦(むつ)みあふ四月かな

に　二番茶を腰を据(す)はらせ揉(も)みゐたる

は　春疾風大きく羽を使ふ鳶

ひ　左手に鎌(かま)を遊ばせ土筆摘む

と　突風に向き変へしのみ落椿(おちつばき)

つ　付き来たる子猫をしかる声弱し

ぶ　ぶさいくな顔で歩かば風光る

の　野遊(のあそび)の弁当にある土筆かな

PDF= 俳誌の salon

雪華抄　ことり

春の宵

あ　飴色の櫛に春光溢れしむ

た　種蒔や曲がりし腰に袋負ひ

ら　来客に桜湯を出し黙しをり

し　静かなり春の光の中にゐて

い　色美しき和紙を選びて花便

し　春眠や洗ひしままの湿り髪

よ　浴槽にしなれる女身花の夜

く　くどくどと返事を教へ入学子

ぶ　不器用に鶴を折る子よ春闌くる

つ　爪弾きし琴の音高く花曇

が　凱旋のごとくに花の咲き満てり

PDF= 俳誌の salon

め　目借時文書く文字の曲がりたる

ば　ばさばさと髪かき上ぐる春愁

え　餌の方へゆるゆる進む春の鴨

る　留守宅の庭に遊べる仔猫かな

に　鶏の春光に玉めきにけり

は　半襟に萌黄を選みて花衣

ひ　雛の目のなほ切れ長に灯さるる

と　とことこと言ひつ歩く児風光る

つ　摘み草や花のあれるは壜に挿し

ぶ　分厚きを競ふかに辞書春の昼

の　野に菫赤子の唇のごとくあり

PDF= 俳誌の salon

雪　卿　集

蝮の寝相

貝森光洋

冬眠の蝮の寝相悪すぎる
罠にかかる鼬の貌とも思われず
梟を見てきしヒトの大きな目
狸汁だんだん月の丸くなり
寒鴉流行り唄など聴いている

にはたづみ

梶浦玲良子

墨をする匂ひ梟ねむる頃
凍滝の日やおろおろと山の音
桐の木の揺れはじめたる潤目かな
手袋の鼡が梯子のぼり来る
一月は忌日が二つにはたづみ

PDF= 俳誌の salon

雪　郷　集

冬うらら

木内美保子

折りたゝむ杖も旅の荷冬うらら
托鉢の碗にはじける夕霰
友を呼ぶ糠蒔く畑の寒雀
里川を雲と流るる冬菜屑
失業者巷に溢れ寒に入る

淡雪

笹村政子

粗縒りの大注連縄に淑気かな
大甕の中に水餅さぐりけり
初旅や孫の創作童話きく
指跡の重なる雪のベンチかな
淡雪に草の滲んでをりにけり

PDF= 俳誌の salon

雪　卿　集

冬禽

枯蓮の真中を道の貫ける

冬禽の黒き塊空の北

師走かな音色の違ふ鈴鳴るも

義士の日の宿酔して目覚めけり

枯蓮や干す舟底の真つ平

松本文一郎

PDF= 俳誌の salon

雪樹集

山彦　山本ミツ子

山彦の凍ててかへりし二月かな
石塔につづく寒林初比叡
茶の花や粥好きなりし父の墓
寒卵石の音たて割れにけり
鮟鱇の捌き残さる乱杙歯

海峡　KOKIA

海峡に湯気たちのぼる寒さかな
夜泣きの子母の布団に引込まれる
木の臼の当りやはらか餅を搗く
正座して賀状書きゐる朝かな
大寒や野良猫野良に生ききれる

PDF= 俳誌の salon

蛍雪譚　六甲

金色の大注連飾くぐりけり　　藤原　春子

豪勢でいかにもお目出度いお正月の大きな注連飾。しかも金色にかがやいているのであるから、今年は幸先が吉であるのは言うまでもなく、大吉のようなありがたさがある。意見報告のような句であるが、ずばっと言い切っているところが佳い。金色の大注連縄に主観（この場合喜びや願い）が込められている。

注連縄に銭さし込みてありにけり　松本　蓉子

初詣の大混雑する様子を、注連縄に差し込んだ賽銭で表したのが素晴らしい。初詣の人々でごったがえす神社仏閣は、参道から混雑していてなかなか本殿にたどり着くことが出来ない。そこでたどり着くのが困難と判断した人は、お賽銭を投げる代わりに注連縄に差し込んだ。その合理的なアイデアを取り上げて、読者の微笑みを誘い出すのである。

PDF= 俳誌の salon

六花集

六甲選

藤原春子

農機具を納屋におさめて注連飾る

金色の大注連飾くぐりけり

おのおのの祠に注連の飾りあり

石段より大注連縄を仰ぎけり

ガラス戸を念入りに拭き注連飾る

松本蓉子

海峡を見下しながら注連飾る

注連縄に銭さし込みてありにけり

大岩を二重に巻ける飾縄

早春の湖に石投げ競ふ子ら

春の風邪夫から移る

PDF= 俳誌の salon